

## 第1章

科学社会学(1)

### 科学の社会学

#### ブルデューの科学社会学を中心に(前)

瀧川 裕貴

葉山高等研究センター

---

今回は、以下の概要で講義をしたいと思います。

1. 社会学とは？
2. 古典的科学社会学 (R. K. マーソンの科学社会学)
3. 科学の科学としての科学社会学 (P. ブルデューの社会学理論に即して)

まず初めに、社会学とは何かについて説明します。それから1930年代に、ロバート・K・マーソンが初めて、社会を対象とした科学社会学を創設しましたので、その理論について解説します。それを受けて、本来ならば、ストロングプログラムから始まる「新しい科学社会学」など、いわゆるSTSの理論や背景を解説するのが常道ですが、今回は別のアプローチをとりたいと思います。その理由は、上記のような新しい科学社会学については、すでに別のところで話しましたし、文章にもしているからです。その論文は、「2007年 科学とコミュニケーション」という総研大の雑誌に掲載されていますので、関心のある方は、そちらをご覧ください。

もう1つの理由は、最近の科学社会学やSTSは、若干局所的かつマニアックで、社会学全体の理論枠組みや問題関心などを反映しているとは言いがたいからです。別の言い方をすれば体系がないため、いきなりそれらを学んでも、社会学を詳しく学んでいない人には、全体の位置づけがわかりにくいのではないかと懸念されるのです。

そこで今回は、別のアプローチとして、科学の科学としての科学社会

学を学ぶために、ピエール・ブルデューというフランスの社会学者の議論を下敷きにして、社会学理論全体との接点を保った科学社会学を講義したいと思います。この講義によってこれまで皆さんが断片的に学ばれてきた科学社会学の知識を体系的に消化できるのではないかと考えています。理論的なところをしっかりと学べば、科学という社会活動を社会学的に見る眼や分析ツールが得られると思いますし、STSの専門的研究については、その後必要になれば、自分で位置づけて参照することができるようになるでしょう。

ブルデューは、近年もっとも精力的に活動した社会学者の1人で、さまざまな分野で多くの著作があります。彼には、科学社会学だけではなく、教育、芸術など多くの分野の研究がありますので、彼から学ぶことで社会学全体の理論枠組みや問題関心から科学社会学を位置づけることができるようになることも期待しています。科学と社会の関係や、社会の中の科学のあり方を捉えるためには、こうした全体的視点が不可欠だと私は考えています。

さらにもう1つの目論見としては、科学という、自然科学の学生にとって身近な社会的世界を分析して見せることで、社会学のものの見方や分析の視角を知ってもらいたいという願いもあります。そうすれば、政治や経済といった他の社会的世界も同じやり方で分析できることに気づくようになるでしょう。それが社会リテラシーを喚起することにもつながると考えています。

## 1. 社会学とは

### 1.1 社会学の問い 秩序問題

科学社会学について言及する前に、そもそも社会学とはどういう学問かについて簡単に触れておきたいと思います。

社会学の問いは、秩序問題に集約されます。言い換えれば、「社会的秩序はいかにして可能か？」という問いです。これは非常に抽象的な問いですが、秩序立っているとは、社会的営みのそれぞれの部分が

相互に依存して構造化されていることを指しています。たとえば、コミュニケーションは社会的行為ですが、一方が何かを話した場合、相手はその発言を受けて発言します。この場合、相互の依存関係が成立します。とりあえずは、それを社会的秩序といっているわけです。典型的には、挨拶です。ある人が「おはよう」と挨拶すれば、相手は「おはよう」とか「元気?」とか、言葉を選んで返します。まったく関係ない言葉を返すことはまずありません。ある意味では、「おはよう」という言葉に次の言葉の選択が条件づけられているわけです。その意味で、挨拶という社会的行為には秩序が存在します。

社会的相互行為は、このような明示的コミュニケーションだけではなく、あらゆるところに存在します。たとえば、E・ゴフマンという社会学者は路上における人々のちょっとした振る舞いの中にも相互行為の秩序を見出しました。たとえば、こうです。人間が雑踏の中を歩いていて、不意につまづいたときなど、「おっと」などのような独り言を發します。これは独り言のようであり、実はそうではありません。誰もいないところでつまづいたら、おそらく、そういう言葉は発しないでしょう。雑踏の中でつまづいたときに發する「おっと」などの言葉の背後には、実は明示的コミュニケーションではなくても、人間は他人のことを見ていることが分かっているので、自分がつまづいたのは、「ちょっとした不注意です。私は健常者です。いきなり異常な振る舞いをする変な人ではありません」というメッセージやシグナルを送り、社会的に批判されたくないという意識が働いていると思われる。その意味では、独り言も社会的行為なのです。

## 1.2 社会学の二面性

---

このように、社会的秩序は、人間が出会えば必ず生じる、きわめて日常的な相互行為で、その規模は、科学、国家、地球大の行動まで広がっています。社会学は、相互行為にはどのようなパターンがあり、それらがどのように形成、維持されるかを研究する学問と言ってもいいでしょう。ここから社会学の二面性が出てきます。社会学は、きわめ

てささいな社会的相互行為に始まり、家族、宗教、国家など、ありとあらゆる社会諸制度の相互依存関係を研究対象にします。実は、これらは同根なので、ミクロな社会諸制度を研究しようと思えば、国家、経済などマクロなスケールの相互依存関係も研究しなければなりません。したがって、会話分析や家族関係のような身近な相互行為の研究から、経済と宗教、科学と政治のようにスケールの大きい社会制度の研究まで、ありとあらゆるものが社会学の研究対象になります。

社会学が政治や経済も扱うとすれば、では、社会学と経済学、政治学とはどう違うのかと疑問をもたれるかもしれません。これは、私の持論ですが、社会科学は経済学、政治学、経営学、社会学等々に分かれています。これらの区分に本質的な意味はないと考えています。自然科学の物理学と生物学のように、研究の対象もアプローチもまったく異なるという性質のものではありません。

ただあえて言うなら、経済学や政治学はいろいろな制度や歴史を所与の前提として研究、分析することを主な関心としているのに対して、社会学はその前提の成立条件や理由を分析し、場合によっては、前提自体を問い直すことを問題関心として抱いています。たとえば、経済学では、所有権制度や人々の選好・行動様式を前提とした上で市場のふるまいを分析しますが、社会学は所有制度の成立や人々の選好の形成をも視野に入れて分析します。

そうすると、他の制度との相互依存関係を考えざるをえなくなります。たとえば経済的問題についていえば、所有権を保障する国家が存在しなければ、経済制度、市場制度は成り立ちませんので、経済は国家と相互依存していることになります。また経済的動機の追求は、近代社会成立の初期には、プロテスタンティズムが影響していたとすれば、経済と宗教も相互依存関係にあります。このように、ある制度の成り立ちを説明するときには、必ず、経済や政治だけではなく、制度の相互依存を考えざるをえません。また、経済や政治、科学などの制度の分析に際しては、それぞれの制度のどこがユニークなのかを知らなければなりません。そのときに他の制度のことも知っておかなく

てはなりません。いろいろな意味で、社会諸制度の相互依存を調べるのが社会学の方法なのです。

### 1.3 科学を社会学的に分析する意味

---

ここまでは、一般的な文脈で社会学のアプローチの方法について説明してきましたが、では、科学を社会学的に分析するとはどういうことでしょうか。この場合も、科学を1つの社会的活動であり社会的秩序(制度)をなしているにとらえ、科学という社会的秩序はそれ自体、他の社会制度と相互依存しつつ存立しているという観点から分析していきます。まず、科学が社会的活動であることは容易に理解されるでしょう。学会発表、論文執筆、教育などは、明らかに、人と人との関係において成立する社会的な相互行為です。そして、科学という社会的秩序も、他の社会諸制度と相互依存しつつ存立しています。この2つの視角から科学を分析するのが、科学社会学ということになります。

後者は、「科学と社会」に関わる分野ですが、実際には、これについて体系的に分析している研究は少ないと思います。マクロな社会制度をすべて見渡して、相互依存関係を分析するのはかなり難しい作業ですから。ただ大枠でとらえるならば、科学が他の諸制度に依存していることをみとるのはそれほど難しいことではありません。たとえば、科学と政府の関係を考えてみると、政府は科学研究のために税金という物理的暴力を背景に国民から徴収します。そうした権力に支えられて科学制度は成り立っているわけです。また、経済と科学については民間企業が自前で研究開発をするという形で結びつくこともありますし、経済活動の収益の一部を税金として納付し、研究資金として再交付を受けるなど、政府を通じて経済と科学が依存関係に入ることもあります。さらに、教育は科学研究者の養成、再生産を担うので、科学と密接な依存関係にあります。あるいは、宗教も、少なくとも科学成立の初期には相互依存関係にあり、科学研究の離陸のための動機を与えたり、敵対したりしてきました。このように科学はその他の社会制度、政治、経済、教育、宗教などと相互依存関係にあり、それら

制度とのかみ合いがうまくいかなくなると科学活動に重大な支障をきたすことになるわけです。

## 2. 古典的科学社会学

### 2.1 古典的科学社会学の主流としての「構造機能主義」

次に、古典的科学社会学を見ておきましょう。現在いろいろ議論されている新しい科学社会学やSTSの先行研究は、古典的社会学の批判から生まれています。したがって、古典的科学社会学はどんな研究をしていたか、そこにどんな目的があったかを知っていなければ、現在の科学社会学も理解できないからです。また、現在批判されているR. K. マートン (Robert. K. Merton, 1910～2003) の科学社会学に対する一般の理解には一方的な誤解もあるので、それを解いておきたいという思いもあります。

マーソンの時代の社会学の主流は、「構造機能主義」でした。マートン自身も、おおまかに言えば、この立場をとっていました。この主義の特徴は、①規範による社会統合の強調、②社会的システム間の機能的相互依存関係の分析、の2つです。また、科学の見方として、エトスという概念を用いました。エトスは、ギリシャ語で、倫理、習慣、心がまえなどをあらわしています。これについては、後でもう少し詳しく述べます。

さらに構造機能主義の場合、社会を1つのシステムとしてとらえますが、制度の間の相互的依存関係の分析に主眼が置かれます。しかも、機能的な相互依存関係を重視しました。この場合の「機能的」とは、科学が機能すれば経済も活性化し、その逆もまた成立するという関係です。

構造機能主義は、社会を上記の2つの視角から分析していきますが、基本的には、予定調和的な社会学でした（この言い方は乱暴ですが、一応ここでは、そういうことにしておきます）。マートンが科学社会学の主題として掲げているのも、「社会的活動としての科学」と「科

学と社会構造とのダイナミックな相互依存」です。ちなみにマートンは、科学者集団の社会学だけに閉じたと誤解されていますが、それは誤りで、少なくとも初期には、むしろ主眼は後者の主題にありました。

## 2.2 マートンの科学社会学における科学の定義

では、そもそもマートンは、科学をどのように定義したのでしょうか。彼は、おおよそ次のように科学を定義しています。

- 1 知識を確認するための特徴的な一連の方法
- 2 これらの方法の適用から生じた累積的な知識のストック
- 2 科学的とよばれる活動を支配する一組の文化価値とモレス (= エトス)
- 4 以上のもののいろいろな組合せ

これらの規定には一方で時代的制約から「経験主義的」色彩も残っていますが、他方で3番目の定義は非常に社会学的で重要です。ここでいわれているのは科学は方法や知識だけではなく、1つの社会的活動であるということです。そして構造機能主義的視点からいえばおおよそ社会的活動であるためには、科学といえども何らかの規範で統合されていなければなりません。ここで出てくるのが、先に紹介した科学のエトスという考え方です。エトスとは、科学者を拘束すると考えられている価値と規範の複合体であって、感情に彩られたものとマートンは考えていました。そしてエトスを次の4つに分類しました。

### ① 普遍主義 universalism

科学的研究の価値や妥当性は、人種や性別に無縁の普遍的基準で評価されなければならないという規範

### ② 公有制 communism

科学的成果は、対価もなく万人に共有されるべきであるとする規範

### ③ 無私性 disinterestedness

科学的研究に対して、経済的利害、政治的利害を持ち込まないという規範

### ④ 系統的懐疑主義 organized scepticism

科学の成果に対しては、体系的に懐疑して批判的にとらえるべきだとする規範

このエトス論は、科学社会学やSTSの分野ではそれなりに知られているものですが、エトスの研究には、①科学がその制度的目標（確証された知識の拡大）を達成するべく機能するための規範であるとともに、②科学と他の社会構造との相互依存関係を捉えるための科学の独自性の同定という意味もあったことに注意しておく必要があります。つまり、科学のエトスを同定した上で、それが適合する他の社会構造とは何かを理解したいというモチベーションがあったと考えられます。実はそこが重要な点なのですが、最近の紹介のされ方では、特に②が忘れられがちなので、注意を喚起しておきたいと思います。

マーソンの研究の中心的な問題関心は科学が適切に発達することの可能な社会構造とは何か、である。これを見失うと、科学のエトス論が単なる分類論になってしまうおそれがある。つまり科学のエトスが上の四つに分析的に定義されたのは、これらが科学的活動の本質をなすと同時に、背景的制度とのコンフリクトを引き起こしやすい、その意味で意識的に擁護しなければならない価値だったからである<sup>1</sup>。

ここで科学のエトスとして規定したのは、別の言い方をすれば倫理や文化的価値に関わります。つまりポイントは、科学的真理の価値に対する信念は、自然に出てくるものではなく、ある特定の文化的、社会的条件の中から生み出されてくるものだということにあります。つまり、科学的真理の価値に対する信念、あるいは科学には価値があるとする信念は、それを支える様々な社会的条件が充足されてはじめて維持されるものなのです。したがって、科学のエトスはある意味では、脆弱な (fragile) もののだとさえいえるでしょう。

1 四角囲みは講義ではふれられなかった重要な点を補足するために設けられている。以下すべて同様。



実は、マートンが科学社会学の研究を始めたのは、1930～40年代の第二次世界戦争中であり、その契機になったのは、ナチス・ドイツの存在でした。ナチス・ドイツのような政治秩序の出現がマートンに示唆したのは、近代科学のエトスがいかに特殊な社会条件に依存しているかということ、つまり民主的な秩序のもとではじめて科学のエトスが維持されるのだということでした。

マートンのドイツに対する具体的分析は、今日からみれば、アメリカの観点からの分析であり、楽観的すぎるくらいがあります。マートンの議論はナチズムの人種主義や反知性主義と近代科学との両立不可能性を強調していますが、ナチス・ドイツがさまざまな科学技術を用いて社会統治をしたことは、現在では常識になっています。そういう批判はありますが、重要なのは問題提起したことです。すなわち、科学が特定文化の所産で脆弱なものであるとしたら、科学との両立が可能な社会制度とはどのようなものを問わなければならないという問題提起が重要なのです。

### 2.3 科学のエトスがもたらす社会的帰結について

---

このようにマートンの関心はエトスの分類論よりもむしろ、科学のエトスとその社会的帰結ということにありました。これは、最近の科学のエトス論議では言及されないことなので、強調しておく価値があります。科学のエトスとその他の社会制度とのコンフリクトを分析することこそがマートンの主目的だったのです。

たとえば、科学の純粋性という規範を考えてみましょう。これは科学の自律性を保持するもので、科学的な業績の価値は、科学以外の価値で評価してはいけないとするものです。科学の普遍性とも言えるこの規範は、科学が自律するために非常に重要な条件です。逆に、ナチス・ドイツのように、この規範に介入すれば、悲惨な事態をもたらすこととなります。

もっとも、たしかに上記のような科学の普遍性規範は重要ですが、実は負の結果もありうるのです。というのも、科学の純粋性の規範を

強調するあまり、科学がもたらす社会的結果を無視することを正当化する方向にも作用しうからです。これは構造機能主義の用語では、「逆機能」と呼ばれています。この結果、反科学運動のもりあがりが生じがちで、ポストモダン以前から有名な反科学運動がいくつもあります。マートンの時代も同様で、たとえばイギリスでは、スタンプ卿が次のように述べて、反科学運動を提唱しました。

「知識の助長という第一義的な目標に関心をもつと、その領域外にあるいろいろな結果は無視されることになるが、しかもこれらの社会的結果が反作用を及ぼし、もとの目標追及が妨げられる。このような構図は、それが目前の関心を充足すると期待されているという意味では、合理的であるかもしれない。しかしそれはまた非合理的でもある。」

この指摘は、科学が純粋性という規範を合理化することで社会的帰結を無視する場合があること、そしてそれは純粋性という規範のもつ負の機能だ、ということ述べています。このように、科学のエトス論と社会的帰結との関係は、マートンの社会学の時代から強調されてきました。さらに、その他の科学のエトスについても言及されており、たとえば「系統的な懐疑主義」も他の社会制度と対立すると主張しています。なぜなら、ナチス・ドイツの場合は典型的ですが、どの社会制度にも存在する“神聖なるもの”を侵犯することにより、科学は反発され、攻撃されるからです。また、公有制は、資本主義経済の「私有財産制」と矛盾する面があります。それは、たとえば特許による経済的利益と科学の成果の公有性を考えれば明らかでしょう。さらに、無私性の規範についても、専門家の権威の乱用による似非科学のでっち上げの誘惑もつきまといます。

公有制および無私性は通常の経済的活動をはじめとする他の社会制度と特にコンフリクトを引き起こしやすい科学独特のエトスである。それゆえに、科学制度には特にこれを機能させるための独特な制度装置が発達する。マートンの承認論や先取権争いの分析論はこの文脈で理解されるべきである。つまり、科

学の世界では通常の経済的報酬を動機として調達することができないため、ノーベル賞などのピアグループによる承認が代替的報酬として発達する。そしてその裏返しとして科学では誰が最初に発見したかという先取権争いが異常なほどの激しさを見せるのである。

このようにみても、科学のエトス論とは、科学者を道徳的にもちあげて、科学を高潔なものとして描くためのものというのではまったくくない。むしろ、科学という社会制度がいかにもろく、壊れやすいのか、だからこそいかなる社会制度がそれを支えていくべきか、といった問題関心に貫かれたものだとみるべきでしょう。

## 2.4 ピューリタニズムと科学の関係の解明

マートンのもう1つの重要な功績に、ピューリタニズムと科学の関係についての研究があります。これは、マートン・テーゼとして、科学史や科学社会学では有名ですが、近代初期のイギリスにおける科学のテイクオフに際しては、ピューリタニズムの世俗内禁欲の精神が大きく寄与したという主張です。そもそも経済的利益や世俗的評価を求めず、純粋に知の追求を求める科学の価値観は特異なものであり、自然発生的に生じるものではありません。そうした禁欲的な価値信念は自然に生まれることはなく、別の制度体系に支えられてしか存在しえないものです。その制度体系が、16世紀の宗教改革から生まれたピューリタニズムだったのです。

これは、より一般的な文脈において、マックス・ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」との親和関係として主張したものの科学社会学バージョンだといえます。証拠としては、17世紀のイギリスの王立協会の創設者たちを調べて、明らかに社会的マイノリティであるピューリタニズムの信奉者が科学者では多数派を占めている点を論拠にしています(実証的な証拠については、その後いろいろな議論があり、完全に立証することは難しいのですが)。

マートンが「科学的真理の価値に対する信念は、自然から出てくるものではなくて、特定文化の所産である」というウェーバーの言を引いていることから分かるように、この主題においてもマートンの力点は科学の文化的、社会的偶有性、そのぜい弱さにあります。特に、こうしたマートンの社会学的な科学の捉え方は、科学というのが一歩一歩、着実に累積的に進歩していくという経験主義的科学観と鋭く対立しています。このような経験主義的な見方は、まさにウェーバーが批判した、資本主義を人間本来の営利欲の自然な発展とする考えと同じ誤謬を犯しているというわけです。

その他、マートンは、科学者コミュニティの社会学について、いろいろなテーマでも研究していますが、たとえば先取権争いや科学者のアンビバレンスの問題などがあります。一方で、科学は無私性を規範としていますが、他方で、先取権争いに典型的にあらわれるように、承認をめぐる激烈な争いが展開されます。さらに、マタイ効果もあります。これは、新約聖書のなかの文言「おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう」（「マタイ福音書」第13章12節）のように、科学的業績を初めに上げた人には資金も潤沢に集まり、さらに良い成果を上げられますが、業績のない人はどんどん研究資金にも事欠くようになることを意味しています。

### 3. 科学の科学としての科学社会学（ブルデューを中心に）

#### 3.1 ブルデューの出自からの考察

以上の科学社会学の古典的業績を踏まえたうえで、ブルデューの科学社会学の中身に入ることにしましょう（Bourdieu 2001, 1975, 1984=1997など）。講義にあたっては、個別に「ブルデューによれば」とは言いませんが、基本的にはブルデューの社会学の見解にそって講義をしていきます。ただし、特に私自身の考えを述べるときは、そのつど、その旨を補足します。

さて、ブルデューの社会学を知るためには、彼がどのような社会的  
位置から発言しているか、その考え方はどのようにして形成されたか  
も含めて、彼の経歴を知っておくことが重要なので紹介しておきます。  
ブルデューは、1930年にフランス南部のダンガンに生まれました。フ  
ランスでは、南部は北部に比べて社会的地位が低いらしく、その意味  
ではマイノリティ意識があったと思います。さらに、小作農の息子と  
して生まれたので、親はインテリ階級ではありませんでした。もっと  
も父はその後公務員になりましたので、ある意味で上昇移動を果たし  
たといえます。ブルデュー自身は、出自からすれば奇跡的に頭脳優秀  
だったらしく、リセから高等師範学校へ進学しました。人文社会系で  
は、最高のエリートといえるでしょう。その後、哲学の教授資格を取  
得しますが、リセの教員時代にアルジェリア戦争に徴兵されました。  
そこで、アルジェリアでの人類学調査を経て社会学へ進みます。

フランスでは、哲学が人文社会系の最高位に位置しており、社会学  
はヒエラルキーの最下層です。その意味で、哲学から社会学に、つま  
り最上位から最下位に移行していることが注目されます。また、教育・  
芸術・文学・住宅市場等の社会学的研究を行ないました。主な著作には、  
『社会学者のメチエ』、『再生産』、『ディスタンクシオン』、『話すとい  
うこと』、『芸術の規則』、『住宅市場の社会経済学』などがあります。

ブルデューは社会階級の「再生産」にこだわりましたが、その理由  
の1つは、彼自身が自分のキャリアの中で、再生産を破ったからだ  
と思います。フランスの文化的・知的エリートの世界で、田舎出身の  
マイノリティの出自をもつ彼が、服装、ふるまいなどさまざまな面で、  
異質な世界を体験するわけです。文化的趣味や習慣のレベルでの差異  
は、教育における再生産の重要な機能であることに気づいたのでしょ  
う。

アルジェリアでの人類学調査も、彼の研究に大きな役割を果たした  
かもしれません。当時のフランスでは、J. P. サルトルの哲学に対して、  
C. レヴィ＝ストロースの人類学が挑戦し、人類学の地位も高くなりつ  
つありました。レヴィ＝ストロースは、親族関係や家族の構造を分析

して、成果を上げていました。ブルデューもそれにのっとなって、アルジェリアの親族関係や家族関係の構造を調査していました。レヴィ＝ストロースは構造主義の立場をとりましたが、ブルデューが実際に調べてみると、構造はあるものの、実際には人間がその中で自動機械のごとく動いているのではないことに気づき、社会学に進んだともいわれています。

### 3.2 問題設定

---

ブルデューの問題設定は、次のように整理できます。

- ◆科学の自律性に対する危機意識
- ◆科学が自律するための、科学に対する歴史的社会的分析
- ◆超歴史的真理の歴史的生成というパラドキシカルな問い

科学の自律性に対する危機意識とは具体的にはどのようなものなのでしょうか。先ほど、マートンのところでも説明しましたが、科学という社会制度が生まれるためには、他のさまざまな社会制度のサポートが必要です。つまり、ある種の社会的条件を前提としてはじめて科学は成立するわけです。しかし、最近の科学は、自律性を成り立たせているような社会的条件が崩れつつあるのではないかという問題意識です。

具体的には、科学研究が、医学や生物学の領域で経済的な利害に従属しつつあるのではないか、あるいは、学問の内部において、特にフランスで登場したポストモダンの相対主義、すなわち科学の真理自体を懐疑する思想が生まれていることなどが挙げられます。前者の事例としては、HIVのワクチンを作るカリフォルニアの企業が当該ワクチンの無効性を証明した論文の出版を妨害した例などを引くことができます。後者については説明する必要はないでしょう。マートンの時代には、民主主義的文化が科学を支えていると信じられてきましたが、ポストモダンの登場は文化レベルでの正当性も危うくなっていることを示唆するものではないかという問題意識もあったのかもしれない

ん。

われわれの問題にひきつけてみても、冷戦構造の終焉後、科学研究に対する政治の介入が、競争的資金などのかたちで強まってきています(もちろん冷戦時代には、軍事研究が背景にあり、見せかけの自律性を保っていたと言えなくもありませんが……)。そういう意味で、科学の自律性は明らかに危うくなっています。したがって社会学の目的は、科学が自律するための社会条件を分析することになります。とはいえ、もちろんこれまで社会に対して与えてきた帰結をすべて無視して、科学の純粋性を主張するというわけではありません。科学の埋め込まれた社会の中でのその役割を再定義することも含めて、科学の自律のための社会的条件を考察することが重要なのです。

ここで誤解されないために強調しておきたいのは、「科学を社会学的に分析すること」は相対主義を帰結しないということです。ブルデューはある意味、ガチガチの科学主義者であり、相対主義とは無縁です。もう少し抽象的な言い方をすれば、科学は明らかに歴史的に生成してきた社会制度であるにもかかわらず、なぜ超歴史的な真理を生成することができるのか、そのメカニズムの分析も、ブルデューの問題意識の中にありました。このメカニズムが明らかになれば、科学が自律する条件も解明されると考えたのです。

超歴史的な真理とは、いったん生成されると、どんな歴史的条件や社会的条件においても妥当するような真理を意味しています。実際に、そういう超歴史的な真理が存在するかどうかは科学哲学的な難しい命題になりますが、基本的には、そういうものをめざし、またそれに近づいていることを科学を实践する側としては前提にしていると考えてよいでしょう。超歴史的な真理をめざしているという「幻想」(ブルデューの用語でいう「イリュージオ」)が共有されているとして、それが人々の社会的利害を超えていると人々が信じることのできる条件は何か、と問いをいにかえることもできるかもしれません。

なおブルデューのさらなる目的は、科学の自律性の条件を研

究する科学の社会学により、社会学それ自体の自律性を担保することにあつた。科学についての社会学的分析は、それ自体科学であるところの社会学それ自体にも跳ね返ってくる。これが再帰性である。「私の目的は、科学知を貶めるためではなく、チェックし強化するために、認知主体に反射可能な認知道具を提供することにある」。つまり、社会学の社会学により社会学の科学性を確立することがブルデューの科学社会学の根底にある問題意識なのである。なお、社会科学はそもそも自然科学ほど役に立たないので自律性の危機を心配する必要がないとの考えは誤りである。実際には、社会科学は必然的に社会の正当性の問題に関わるため、他の権力からの干渉の度合いは自然科学よりもはるかに高いといえる。

### 3.3 基礎理論

ブルデューの基礎理論は3つあります。それぞれの詳細は次回の講義で紹介しますので、ここでは、簡単に基本的な概念だけを説明しておきます。それらは、①界、②資本、③ハビトゥスです。この3つの概念を理解すれば、社会のさまざまな事象をブルデュー的に解読することができるでしょう。

#### ①界 (champ)

フランス語ではchamp、英語ではfieldに該当します。「場」という訳語をあてることもできますが、今回は「界」で統一します。ブルデュー自身は、数学や物理学でいう「場」、「界」の意味をこめていることに注意してください。特に定義するとすれば、「相対的に自律しておりかつ構造化された社会的関係の総体」とでもいえるでしょう。

たとえば、社会には、科学界のように自律した空間があり、そこにはさまざまな人が属しています。そして界に所属する行為者たち（この場合には科学者たち）のあいだには師弟関係、友人関係、敵対関係などの社会的関係が存在します。この社会的関係を広い意味での力の



作用によって読み解くのがブルデュー理論の戦略です。特に行為者たちは界のなかである特定の利益をめぐる競争や闘争を展開しているというイメージが重要です。その闘争の力を規定するのが、「資本」であり、資本が多ければ多いほど、「力」が強くなります。ただし力といっても単なる物理的暴力だけではなく、ある人の制度的地位やまた科学者として純粋な才能によって人を引き付ける力などが含意されているので誤解のないようにしましょう。

### ②資本

資本というのは要するにそれをもっていると界の中での競争において有利になるような財産のことです。経済力などの経済資本、それから教養の程度を示す文化資本、そして人間関係やコネクションの豊かさを表す社会関係資本の3つが代表的です。特に前者2つは社会全体の構造を規定する主要な因子であり、かつそれらが交差構造をなしているというのがブルデューの主張です。たとえば、文化資本が非常に大きく、経済資本が小さい層が科学者であり、逆に経済資本が大きく、文化資本が小さい層が経済人ということになります。農民や職人は、双方の資本ともに小さい層にあたります。ブルデューはこの理論をもとに、人文社会科学を中心としたフランスの大学界に属する研究者たちについて、コレスポンデンス分析という統計手法を用いて、資本の種類と大小関係をふまえて精緻に解析しました。

日本でも、教育社会学の竹内洋先生が、日本の大学の法学部と文学部について同様に分析し、経済資本が高いのは法学部で、文化資本が高いのが文学部であることをマッピングで示しています(竹内2005)。理科系では、医学部と理学部がそれぞれ法学部、文学部に対応するのではないのでしょうか。

### ③ハビトゥス

これは、ブルデューがつくった概念で、社会学者にとってはなじみ深い概念ですが、なかなかそれ以外の分野の人には理解しにくい面があります。身体に埋め込まれた暗黙知のようなものを指していますが、一言で説明するのは困難なので、この講義の全体を進める中で理解し

ていただければと思います。

以上、ブルデューの科学社会学の基本的な概念を簡単に紹介しましたが、次回の講義では、具体的な事例も含めて、もっと詳しく解説したいと思います。